

体力の衰えの方は、これ亦余りにも歴然としていた。清津川上流の赤湯への道を辿ったときのこと、棒沢の出合いをすぎて谷壁が急になるため登路は鷹の巣峠へと長い急な捲き道となる。同行の大学院諸君の若い脚力には及ばず、ロックハンマーで岩石をたたいては時を稼いだこと再三であった。登攀に弱くなったのは息切れの所為で、鈍った体を何とかせねば、ついに山から突き離されるぞと、自ら肝に深く銘じた次第である。前山は容易に車で越えられるようになったのだから、齢を重ねても、深山の主部を調査に歩くことは将来ますます有望である。これこそ近代的道路の与えてくれる最大の恩恵だとひそかに思っている。

お茶大の環境変化と災害

正井泰夫

お茶の水女子大学に勤め始めてから満3年たった。その間、ちょうど一般の都市が示す変化や災害と同じような環境変化や災害を身をもって体験してきた。お茶大の変化は、ちょうど都市化の進展と似ている。緑の木立を切りたおして住宅や工場やビルが建つのも同じように、地理学教室のすぐ周りでもビルブームが続いている。講堂裏のひなびた庭には古めかしい渡り廊下や灌木をとり払って、クリーム色の中層ビル四階が建ち、家政学部が研究や教育に使用している。このビルを建設している途中、失火により僕の研究室は大きな損害を受けた。つまり、煙と火の子と水により、沢山の研究資料が損失したり、よごれたりした。そして何日もの間、研究室の使用が不可能となった。これは全く、隣りの家から火がでて、そのために生活を大きく乱される都市の火災と同じことであった。

現在、僕の研究室の窓のすぐ外側では、人がはげしく行き来している。新築なった理学部の高層ビル（6階、エレベーター付き）に机や椅子を運び込むためである。お茶大の高層化といえば聞こえがよいが、このおかげで緑の木立が大量に減り、窓のすぐ外側には、何本かのイチョウが、いつ切られるかとおびえながら立っている。正面の1本はもう6月だというのに、緑の芽がほんの少し出ただけで、この分だと速からず枯れるだろう。これは大気汚染のせいかどうか分らないが、それにしても石ばかりの環境になりつつある。この新築工事のおかげで、土ほこりがものすごく、風の吹く日は、いくらむし暑くても窓が開けられない。廊下側のドアも、うっかり開けると土ほこりの入口になってしまう。理学部関係の人に相談したら、その後、水をまいてくれるが、効果はきわめて不十分である。それに、これから真夏をひかえて、このガラスの多い巨大なビルの照り返しほどのくらいあるだろうかと、今からひやひや、いや、汗がじっとりとにじみ出る思いである。

部屋の二方は交通人口が余程少ない時に考案したと思われる、足音のよく立つ廊下で囲まれてい

いる。都市の大きな問題に騒音があるが、騒音は何も自動車・飛行機・電車ばかりでないことを毎日痛感している。

以上、火災・大気汚染・暑熱・騒音という典型的な「都市災害」をあげたが、風水害もかなりこうむった。窓の一つがこわれていて、すき間があいており、雨がよくとびこんできたからである。今では開かないように「工夫」してくれたため、雨は入らないが、その代り暑くても開けられない。外に面している4つの窓のうち、1つは前から開かず、他の1つは開けたら中に閉められないので開けない。残りの1つはさびついているが何とか開けられるのでそれをやっとな開け閉めしている次第である。これらは天災ではなく人災である。(お茶大のいい点は省略します。)

チ リ ン ピ ン

貝 山 久 子

寮の問題がかまびすしい折から、私が若い日の2年余をすごした東京女子高等師範学校寄宿舎について、少し述べてみたいと思う。東洋一と称せられていたその寄宿舎生活の経験を持つ人も、この界限にはあまり多くはないであろう。現在山の上とよばれているヘルスセンター・学生会館・音楽練習室・食堂・学内寮のしめる場所に、第一寄宿舎、蘭・竹・梅・菊の四棟の寮があり、現在の中学の敷地に新寮とよばれる二棟の第二寄宿舎があった。

“チリンピン”は入寮して真先に教えられた言葉であり、また当時の寮生活を最も端的にあらわす言葉である。寮では、起床、就寝、門限、食事、黙学すべての行動はベルによって一糸みだれず開始されなければならない。“朝起床のベルが鳴り出したらすぐピンと起きるのですよ。鳴り終わってからでは遅すぎます”これがチリンピンの由来で、全寮制度であったから、寮生活はいうまでもなく教育の一環として行われていたのであり、知育は学校で、徳育は寄宿舎で、という考えが一般的であったように思う。私共の頃はさすがに地理学巡検に舎監が同行されるようなことはなかったが、舎監の権限もおそろしさも亦絶大で、雑巾のかけ方が廊下の板目に平行でなかったり、コートを羽織って歩いてたりしても忽ちお叱言を頂戴した。これらはすべて、女高師の生徒は全国から選ばれて入って来たエリートであり、卒業後は社会の指導的立場に立つべき運命を担っているという考えに由来していたのであろう。ところで問題のチリンであるが、起床は一年を通じて5時半、始業は8時10分、門限は5時、就寝は9時であった。冬の5時半はまだ暗く、中々辛かったように思う。また7時限まで講義をうけて、神保町に古本をあさりに出かけ、うかうかしていると正門前で市電を降りるのが門限5分前などということになる。5分で寮まで辿りつき、名札を返し、外出簿に記入して部屋の入口に整列しないと、門限遅刻と寮の日記に記入されてしまう。エイとばかりにハイ